

『もう一つのお祈り御製（和歌）』

平成三十一年二月二十一日

今村 忠男

「和歌とは」

和歌に表されているのは、人の「心」です。ある日ある時、私はこう思った、こう感じたという、その気持ちを表現したものです。自然の美しさに感動する、家族を思う、恋をする。基本的な感情は今も昔もそう変わらない、和歌はそういう変わらない「心」を歌うものなのです。和歌には「変わらないで欲しい」という願いを込めることが大変多いです。自分の心を伝え、他者の心を理解する、和歌はそのために詠まれたのです。

和歌とは、古代の「古事記」や「日本書紀」などから伝わる五音・七音で謡う歌謡にその源を発し、古代社会に舞や音楽を伴って謡った神への祈りから生まれてきた詞の調べで、文字さえもない時代から口承で伝わってきたものであります。日本人固有の感性や美意識から思想・信仰までを日本人独創の表現で日本オリジナルの表記によりできています。

「万葉集」

天皇の和歌は四十首ほどあり、全体の約1%程度ですが、内容を一言でまとめれば、一国を支配し、平穏に統治することを目指し、国土を賞賛し、豊作を願い、民の幸福を祈る、ということになります。では、巻頭の歌と二番目の歌を見ていきます。一番目は、雄略天皇（第21代天皇、古墳時代）です。

籠（こ）もよ み籠（こ）持ち ふくしもよ みぶくし持ち この丘に 菜摘（なつ）
ます兒 家聞かな 名告（の）らさぬ そらみつ 大和の国は おしなべて 我こそ居れ
しきなべて 我こそいませ 我こそは 告らめ 家をも名をも

意味としては、籠よ美しい籠をもち、へらよ美しいへらを持って、この丘で若菜を摘んでいる娘よ家を告げなさい、名を名乗りなさい。大和の国はことごとく私が統治しているのだ。すみずみまで私が支配しているのだ。私こそ名乗ろう、家も名も。となります。

これは、天皇が名もない少女に愛を注ぐという、純粋な一面と豪族の娘もしくは豪族を従えるという一面もあったと思われます。男女の良好な関係は民衆の生活の基礎です。おそらく、二面（二層）になっていることで、表現に深い味わいが生まれるのではないのでしょうか。二番目は、舒明天皇（第34代天皇、飛鳥時代）です。

大和には 群山（むらやま）あれど とりよろふ 天の香具山 登り立ち 国見をすれば
国原（くにはら）は 煙立ち立つ 海原は かまめ立ち立つ 美し国ぞ あきつしま

大和の国は

意味としては、大和には多くの山々があるが、特によい天の香具山に登り立って国見をすると、広い平野には炊事のための煙が至る所から立ちのぼっている。広い海原には、鷗がたくさん飛び立っている。素晴らしい国であるよ、大和の国は。となります。

これは、立地から陸と海が一緒に見える訳ではないので、叙景歌とはいえませんが、抽象的にあるべき姿を歌ったものといえます。豊作と豊漁を願うという意味が込められています。もうひとつは、国のあり方を高い所から望み見る「国見」という行為です。見ることは視察に留まらず、良き状態への転換を生む力の付与なのであります。見て誉めることは対象を誉めた状態に転化させることなのです。天子様が見て誉めると状況はその通りになる。それは、古代人にとって観念上のことではなく、現実のことでもありました。

国見によるかまどの話は仁徳天皇（第16代天皇、古墳時代）の話が有名ですが、その他にも崇神天皇（第10代天皇、古墳時代）は、「**農は天下のものである。民の生きていく命綱である。今、河内の狭山の田には水が少ない。よって、この地域では十分に農ができないでいる。池溝を多く掘って民のなりわいを広めよ**」と日本書記に詔として発せられたとあります。このように神話の時代から歴代の天皇に受け継がれてきているのです。

ここで時代を一気に現代に戻しますと、平城遷都千三百年の記念式典が平成二十二年十月、両陛下のご臨席のもとに開催されました。その際、万葉集についての話題になると、今上陛下（当時）が「和歌には和歌以外の力がありますね。」とおっしゃられたとのことです。

万葉の時代は、和歌の力を以って天下の平和を実現できると考えられていました。それは、「古今和歌集」の仮名序にみられます。仮名序には、「やまと歌は、人の心を種として万の言の葉となぞなりけり。世の中にある人、ことわざしげきものなれば、心に思ふことを、見るもの聞くものにつけて言ひ出せるなり、花に泣く鶯、水に住む蛙の声を聞けば、生きとして生けるものいづれか歌をよまざりける。力をも入れずして天地を動かし、目に見えぬ鬼神をもあはれと思はせ男女の仲をもやはらげ、たけきものの心の心をも慰むる歌なり。」とあります。

前段の一文は、日本人の心から生まれた歌詞による〈倭歌〉と表現が定義され、最終の段では、天神地祇の心を動かし、靈魂・神霊をも感激させる人間界を超えた力を発揮するものこそが倭歌、つまり和歌であると高らかに謳い上げられているのです。神を送る宮での神事歌謡となる「神楽歌」や新帝即位の年に自ら皇祖や神々に祀る大嘗祭や神祇神仰を

詠む「神祇歌」も日本本来の信仰と思想を表出する和歌として現代まで生き続け、継承されています。倭歌、つまり和歌は有史以来天皇にとって〈神に祈る〉ために主となる表現であるとともに、御自らと神とをひとつにつなぐ中心の表現方法であって、天皇が天皇として存在するために必然となる祭祀で、また天皇に在る立場から神と交信するために、常に本質の方法となっていた表現であります。それはそのまま、天皇が自らの心の制約を一切うけることなく表すことができる唯一の手段が和歌であると同時に、本来となる〈神への祈り〉として唯一の詞こそが倭歌・和歌に他ならないことを意味します。「民が幸福に暮らせる国造り」をするために和歌を謡うのです。別の言い方をすると、利他心です。もう一つ見てみましょう。 持統天皇（第41代天皇、女帝、飛鳥時代）の御製です。

春過ぎて 夏来るらし 白たへの 衣干したり 天の香具山

これは、春が来れば春らしく、夏が来れば夏らしく、と四季の自然な運行こそ生活の基礎となります。昨今は異常気象が多いですが、これは政治が悪いということでしょうか？ そうならないためにお祈りをされています。

「武家政権の時代」

公家・豪族の時代から武家の時代へと移り、千二百年代になりますと、鎌倉幕府が力を持つようになり、天皇の力が弱ってきました。鎌倉幕府との対立で、“承久の変”が起こります。この承久の変では、後鳥羽上皇（第82代天皇、平安時代末期から鎌倉時代）が隠岐へ流されるとか、順徳天皇（第84代天皇、鎌倉時代）が佐渡へ流される、ということが起こりました。この事件の十六年前に「新古今和歌集」が作られ、天皇を中心とした平和な時代を造ろうとされたことが想像つきます。その後鳥羽上皇の御製です。

奥山の おどろが下も 踏み分けて 道ある世ぞと 人に知らせむ

意味としては、たとえ山の奥のとげのある低木が乱れ茂っている所であろうが、私はおそれず前に進み、今の世よりも正しい道があることを示して見せる。となります。これは、道は隠されているが正しい道はあるのだ。道がなくても自分で切り開いていくのだ。どういう困難に直面しても進んでいくのだ。なければ私が第一歩を踏み出してみせる。後でみんなが理解してくれる。いわば、失敗してもそれを学ぶ。後に続くと信じる。となります。次に順徳天皇の御製です

。

奥山の 柴の下道 おのづから 道ある世にも 会はむとすらむ

まさしく、父君に呼応して、王政復古への志念を詠んでおられます。その順徳天皇が「禁

秘抄」という物を書きました。これは宮中のしきたりを箇条書きにしたものです。その冒頭に、「禁中の作法は、神事を先にし、他事を後にす。且暮敬神の叡慮懈怠なし。あからさまにも神宮ならびに内待所の方を以て、御跡なしたはず。」と書かれています。そして、第一に、「御学問のこと」と書いてあり、学問することが第一の役割とする。ところが、諸芸能の項目には、「好色の道、幽玄の儀すて置くべからず事」と書かれています。好色とは、いろ好みです。今では、「お前好色が」と言われて喜ぶ人はまずいません。しかし、この時代は「好色」とは、心の優しさという意味です。色は親しみという意味です。「幽玄の儀」とは、神秘的な内奥を知ることでしょう。この「好色・幽玄」は和歌により養成されるというのです。心の優しさと奥行きが天子に大切に、それを養うのが和歌です。と書かれています。

恋愛を謡った歌が尊重されるのは、人間の心に潤い優しさを与えるからです。「優しい」とは「恥ずかしい」という感情です。相手を立派に思い、自分を恥ずかしいと思う謙虚な心持ちであります。天皇は、民に優しい感情を与える存在であり、同時に治者として四季の運行を実現することが大切な役割とされてきたのです。

天皇にとって、もっとも重要なことは神事を優先させること、つまり、敬神であり、神祭りがあると皇室存亡の危機の中で明言されたのです。従って、天皇が先祖の神々のお祭りをされることは（祭祀）、「民が幸福に暮らせる国を作りなせ」という先祖神から与えられた使命を受け継ぐことなのです。いわば、私たちの見えないウラが祭祀で、オモテが和歌といえます。使命を果たすべき民への想いをみていきましょう。光格天皇（第119代天皇、江戸時代）の御製です。

身のかひは 何を祈らず 朝な夕な 民やすかれと 思うばかりぞ

これは、自分のことで何も祈ることはない。朝な夕なに民安くあれと思うばかりである孝明天皇（第121代天皇、江戸時代末期）の御製です。

澄ましえぬ 水にわが身は 沈むとも にごしはせじな よろづ國民

これは、淀んだ水にわが身は沈むとも千万の国民を汚してはならない。と、民を想う和歌を詠われています。

「日露戦争での話」

明治維新後、他国との戦いも避けられない状況の中、日清・日露戦争があり、日露戦争で明治天皇は次のような御製を詠まれました。

国のため あだなす仇はくたくとも いつくしむべき事な忘れそ

明治天皇は戦闘の報告を受ける際に、“我が軍の損害は、この度は甚だ僅少でございました”聞かれると、心から安堵を示されましたが、“敵軍の死傷は多数でございました”との奉上には御表情はたちまち曇って、御心痛の様をありありと浮かべられたと言われています。まさに「よもの海 みなはらからと 思う世に など波風のたちさわぐらむ」の祈りは言葉だけではなかったのです。

君もこのような心持なら、民もそうでありました。乃木將軍とステッセル將軍の話は、戦い終われば人として「いつくしむ」ことを体現された事例です。ほかにもう一つ、「道すがら あたの屍に 野の花を 一もと祈りて 手向けつるかな」（陸軍少将中村寛の歌です）。これは、進軍の道すがら、敵兵の死体にそっと花を手向ける者もいたのを詠んだ歌です。これもそのひとつではないでしょうか。

「昭和」

昭和といえば、大東亜戦争は避けられない出来事の一つと言えます。その戦争を通して見ていきたいと思えます。昭和十六年に日米交渉があり、「これが成立すれば、日本前途は明るくなるに違いないが、もし万一、この交渉が成立しない時は戦争になるかもわからない」と危惧され、最後まで外交優先をふされました。そうして御前会議において、日露戦争の始まった年の明治天皇の御製を詠まれました。それが、よもの海 みなはらからと 思う世に など波風のたちさわぐらむ。意味としては、四方の海にある国々はみな兄弟姉妹とと思っているこの世の中であるのに、どうして波風が立ち騒ぐのであろう、となります。次は終戦の際、終戦を決断なされた昭和天皇のその祈りをご感慨されて詠まれた御製です。

- 一首目 海の外の陸に 小島にのこる民のうへ 安かれと ただ祈るなり
- 二首目 爆撃に たふれゆく民の上をおもひ いくさとめけり 身はいかならむとも
- 三首目 身はいかにならむとも いくさとめけり ただたふれゆく 民をおもひて
- 四首目 国がらを ただ守らんと いばら道 すすみゆくとも いくさとめけり

前半の二首からは、たとえ昭和天皇御自身の「身はいかならむとも」ただただ「民のうへ」、この「民の上」だけを御一心に思われて、「いくさとめけり」と戦争を止められたこと、その御一念が深い感慨から伝わります。また、後半の二首は、戦後の日本がどれ程に困難な「いばらの道」を進むことになろうとも、全ては「たふれゆく民」、それだけを思われて終戦の御聖断を下されたことへの御決意と御覚悟までが詠まれています。次に、戦後の復興

をえた在位五十年と七十歳を迎えられた際の御製です。

在位五十年 喜びも悲しみも 皆国民とともに 過しきぬ この五十年
七十歳になりて 喜びも悲しみも 民と共にして 年はすぎゆき いまはななぞち

この御製から、昭和天皇のお喜びお悲しみは、いつも皆国民と共に「過しきぬ」思い、連綿と続く（民とひとつに）歴史を積み上げられての重みであるといえます。この思いは、即位後の勅語からも伝わります。「踐祚後朝見ノ儀」の「勅語」の中には、**永く四海同胞ノ誼ヲ敦クセンコト是レ朕カ軫念最モ切ナル所** という一詞があり、世界の人々が皆永遠に同胞の親しい交わりを深めることこそが最も切望する所と明言されています。そして、「即位禮當日紫宸殿ノ儀」の「勅語」でも、**君民體ヲ一ニスレ我カ國體ノ精華ニシテ當ニ天地ト並ヒ存スヘキ所ナリ** と、天皇である君と国民となる民が体制もひとつに一体となって一国を成す国の姿、それこそが昭和天皇の最も美しく純粋な理想と宣われます。

「平成」

なみにより避難せし牛もどり来て角突きの技見るはうれしき 御製
かの禍ゆ四年を経たる山古志に牛らは直く角を合はせる 御歌

この御製と御歌は、山古志村に建立された碑に刻まれたものです。「天子様が見て誉めると状況はその通りになる」という国見の象徴です。上述した国見が現実には起きた例でもあります。平成十六年に起こった中越地震での話しです。山古志村の長島村長は、全村避難勧告をし、村民二千二百余名の避難を見届けて村を離れる際、その時の心境を次のように語っています。「あの時は、自分が情けないのと、何をしたらいいのかわからない絶望感で一杯で、涙が止まりませんでした。村人を避難させた後、自衛隊の方と村の中を最終点検することになりました。その時、口が裂けても村民には言わないでおこうと思ったことがありました。二度とこの場所に住むわけにはいかないかもわからない、実はそんな気持ちを抱いてしまったんです。」と。地震から二週間後に両陛下がヘリで山古志村をご視察になることになった。その際、陛下は、「牛はどうしていますか」「錦鯉はどうしたんですか」とご質問されました。もちろん、村民のことも心配されていたのはいまでもありませんが、陛下が牛や錦鯉のことも訊ねられたのは、山古志村の闘牛「角突き」は戦国時代以前に遡る神事であり、また錦鯉の養殖が山間部の生活の糧であったからです。また、「きれいな村だったんでしょね」というお言葉も述べられ、その言葉が村長の胸に刺さり、この村を取り戻さないわけにはいかないと思って、私の勇気を奮い起してくれましたと。

それから復興に向けた努力が始まるのですが、生活の復旧が最優先で、角突きなどという文化的なものは後でいい、という議論もありました。しかし、牛の命を救うことと文化

を守ることは私たちにとっては一つでした。牛が元気になれば私たちも元気が出せるという思いがあったからです。

地震から四年後の平成二十年、再び両陛下は山古志村をご視察されました。この時は、上空からではなく、村内を歩かれて、錦鯉の養殖や牛の角突きをご覧になられ、その時のお気持ちを詠まれたのが上述の御製と御歌です。角突きは山古志村の人々の心を結びつけるものであり、それが復活したということは、もとの「美しい村」に戻ったということです。山古志村の碑は、両陛下に見守っていただいて、復興を成し遂げた村民の感謝の表れでありました。

次は終戦の日のものです。(戦後五十年)

国のためあまたの逝きしを悼みつつ平らけき世を願ひあゆまむ 御製
海陸のいづへを知らず姿なきあまたの御霊国護らむ 御歌

1) は、国のためにたくさんの方が戦死しました。その英霊を追悼しながら、祖国日本の平和と繁栄を願い、前を向き歩んで行きましょう。2) は、海や大地の何処かはわからないけども、姿なき数多の英霊の御霊が護っておりますこの日本の国を、となります。この歌は、先の大戦で戦死した御霊が靖国に祀られ、五十年の先祖供養を受けともらい上げを迎え、一家、一族、の繁栄を見守る「祖霊」となり、祖国日本を護ってくださっておられます。また靖国に祀られていない多くの御霊も、それぞれの縁者のもとで、先祖供養を受け「和御霊」「祖霊」となり、一家、一族の繁栄を見守っていますよ。それゆえに大切なのは、慰霊されぬまま海外の戦地に眠る幾多の英霊です。という意味も込められている歌です。このように今上陛下は昭和天皇の意志を引き継ぎ、国内・外と追悼・慰霊の旅が続けられているのです。

「万世一系と知らず」

以上の和歌からみるように、古代から現代に至るまで永く生きてきた天皇を中心とする社会に見られた、君と民が常にひとつの形を成して日本を安定に治めてきたこの国の在り方が我が国日本です。百二十五代続いている皇統を守っていくことも大切ですが、「君民體ヲ一ニス」の言葉から君と民が一体となって日本の国の姿を創ってゆく精神も守っていかなければなりません。この精神は、聖徳太子の十七条憲法の第一条「わをもって貴しとなす」に始まり、明治天皇の五箇条の御誓文として継承されてきています。皇室は世界にも見られない神話の時代からもつながっています。この和の精神も神話からつながっているといえます。それは、天の岩屋戸開きの話にあるように「八百万の紙に、自ら考え皆で力を合わせ、物事を解決するのですよ」と自覚させるためのものであり、まさに和の精神の

始まりなのです。

初代神武天皇は橿原の地で、「このうえは、天照大神のお心にそうように大和の国のいしずえをしっかりとしたものにするように、お互いに豊かな心を養いましょう。人々がみな幸せに仲良く暮らせるように努めましょう。天地四方、八紘にすむものすべてが一つ屋根の下の大家族のように仲良く暮らそうではないか。なんと楽しくうれしいことだろうか（現代文）」との詔を出されました。つまり御製とは、人の心・和の心が変わらないでほしいと願いを込めたものであり、お互いに豊かな心を養いましょう。そして、みなが仲良く暮らせるように力を合わせていきましょう。という思し召しなのです。

参考文献

昭和天皇 御製にたどるご生涯 著：秦 澄美枝 ， PHP 研究所

天皇皇后両陛下 慰霊と祈りの御製と御歌

著：割田剛雄・小林隆 ， 海竜社

うたう天皇

著：中西進 ， 白水社

皇室の祈り

著：伊勢雅臣 ， 育鵬社